書評

李艶麗『晚清における日本語小説の翻訳及び紹介に関する研究（一八九八～一九一一）』

李艶丽著『晚清日语小说译介研究（1898–1911）』
上海：上海社会科学院出版社、二〇一四年

寶　新光

晚清（清朝末期）、特に日清戦争（一八九四～一八九五）・戊戌（ぼじゅつ）変法（一八九八）以後の中国文学界は、欧米や日本の小説を大量かつ急速に吸収し、翻訳小説の急成長の時代を迎えた。そのうち、日本語を通じて翻訳された作品は、かなりの比重を占めており、多大な影響を及ぼした。本書は、晚清中国における日本語小説の翻訳を全面的に検討しており、中国近代翻訳文学研究、日中近代文学関係研究における近年の重要な研究成果と称すべき一冊である。

全書の分量は二十一万五千字、二〇一頁であり、本文は三部九章で構成されている。少し長くなるが、目次を紹介しておきたい。第一部「晚清小説の新たなジャンル」、第一章「総論」、第二章「晚清小説の特徴と新たなジャンル――晚清四大小説雑誌と『新小説』の状況」、第三章「知られざる「文豪」――徳冨蘆花を例として」。第二部「欧米－日本－晚清――文芸思潮の間接的取捨選択」、第四章「虚無党小説と無政府主義思潮について」、第五章「晚清における戦争小説翻訳の整理と文芸思潮について――戦争小説はなぜ中国で冷遇されたか」、第六章「晚清科学小説と世紀末思潮――二つの『世界末日記』を例に」、第七章「東西交錯下の晚清冒険小説と世界秩序」。第三部「日本－晚清――文芸思潮の直接的取捨選択」、第八章「「政治」と「人情」の間で――晚清政治小説と明治政治小説論」、第九章「晚清の日本語小説翻訳における硯友社系小説――日中文壇の言情小説」。巻末には付録として著者が整理した「晚清日本語小説翻訳書目録（一八九八～一九一一）」が収められて

いる。（以上の章題翻訳は書評者による。）

日中近代文学関係の研究書は、中国では一九八〇年代以来、およそ二年に一冊のペースで出版されてきた。書評者の調査でその重要な例をあげると、王暁平『近代中日文学交流史稿』（長沙：湖南文芸出版社、一九八七年）、張福貴・靳叢林『中日近現代文学関係比較研究』（長春：吉林大学出版社、一九九九年）、王向遠『二十世紀中国的日本翻訳文学史』（北京：北京師範大学出版社、二〇〇一年）、方長安『選択・接受・転化――晩清至20世紀30年代初中国文学流変与日本文学関係』（武漢：武漢大学出版社、二〇〇三年）、康東元『日本近現代文学翻訳研究』（上海：上海交通大学出版社、二〇〇九年）、王志松『小説翻訳与文化建構――以中日比較文学研究為視角』（北京：清華大学出版社、二〇一一年）などがある。日本でも、齋藤希史『漢文脈の近代――清末＝明治の文学圏』（名古屋：名古屋大学出版会、二〇〇五年）を初めとした重要な著作が出版されてきた。

上記の研究書はだいたい十九世紀末から二十世紀前半ないし後半にかけての比較的長い範囲を取り扱っているが、李艶麗の著作は年代を「一八九八年（戊戌変法）～一九一一年（辛亥革命）」という日本語小説の翻訳が最も盛んに行われた清朝最後の十四年間に絞り込んでいる。またこの時期に対して本書以前の研究は、主に断片的ケーススタディや概論的論述にとどまっていたが、本書は、晩清日本語小説の翻訳を「欧米－日本－晩清――文芸思潮の間接的取捨選択」と「日本－晩清――文芸思潮の直接的取捨選択」と分類したうえで、晩清小説の新たなジャンルの出現に日本が与えた影響から検討し始め、外交探偵小説・虚無党小説・戦争小説・科学小説・冒険小説・政治小説・言情小説などにわたって、それぞれについて日本語底本を考証し、翻訳過程に発生した微妙な変容や日中近代文学の相違などについて、全面的かつ深層的に論証している。本書は一八九八年から一九一一年までの短い期間における日本語小説の翻訳を体系的にまとめ、さらに詳しく深く考察したものであると言える。

清朝末期から民国初期にかけて、中国が日本から受け入れた小説には、日本人が創作した作品と日本人が翻訳・翻案した西洋の作品の二種があるにも拘らず、学界ではその区別を曖昧なままにして「日本小説」という用語を一般的に使用してきた。これに対して李艶麗は、「日本小説」に替えて「日語小説（即ち日本語小説）」という用語を使用している。「日本語小説」という用語には、日本人が創作した作品と日本人が翻訳・翻案した西洋の作品の両方が含まれるので、従来の「日本小説」よりも研究対象の性質がより明らかになった。管見の限り、清末民初の日中文学関係の研究において「日本語小説」という用語を正式に使用したのは、本書が初めてと思われる。この分野の研究を進めるためにはまず研究対象を正しく表す用語の確立が重要なことは言を俟たないが、本書

は建設的な提案をした点で、意義が高いと考えられる。ついでながら、「明治小説」[1]という用語は、著名な晩清文学研究者夏暁虹教授によって用いられたことがあり、広く使われるには至っていないが、合理性のある用語であることを書き加えておく。

巻末に収められた「晩清日本語小説翻訳書目録（一八九八～一九一一）」は、晩清中国における日本語小説の翻訳作品合計二〇一種を網羅的に収録したもので、中国語訳本のみならず、日本語底本ないし西洋の原典の情報まで提示しており、同分野の研究者にとっては大いに参考価値がある。この目録は、主として樽本照雄の『新編増補　清末民初小説目録』（済南：斎魯書社、二〇〇二年）に依拠しているものの、著者独自の調査で新発見・修正した約三十種が加えられており、晩清中国における日本語小説翻訳に関心のある研究者には大いに参考になる貴重な資料であるということを重ねて強調しておく。

中国学界では、従来「晩清に日本の小説を翻訳した際、〔日本の〕主流文学を粗略にしてしまっていた」（四頁）という否定的な認識が一般に受け入れられてきた。しかし本書は「日本を参照に」「周辺から中国を見る」「外から中を照らす」（四～五頁）という視点をとっているので、「日本語小説の原型」（一六五頁）を究明した上で、日本語小説の中国における翻訳を考察し、日中文学の比較分析を展開している。そのために著者は晩清中国に紹介された日本作家の本国における位置づけを詳細に検討した後で、従来の認識に反論をし、晩清中国の小説翻訳は明治日本の主流文学を粗略にはしていなかったと主張している。本書は明治日本の文壇・思潮の状況についてかなりのページを割いていることから、著者は日本の状況を充分に吟味したうえで、この結論に達したのではないかと考える。この認識の修正によって、晩清中国の日本語小説翻訳を研究する価値の見直しが期待される。

本書について、敢えて望蜀（ぼうしょく）を述べるとするならば、巻末の翻訳目録が中国語訳本に関してその初版しか収録していないことである。各翻訳作品の中国における伝播過程を示す再版の情報もぜひ知りたかった。せっかくの翻訳目録なので、作品名・訳者（作者）・出版社（掲載誌）・発表年代のほかに、小説類型（ジャンル）・出版地・分量（ページ数）・定価・連載回数・発行部数・再版回数などの情報もあればなお素晴らしかったであろう。

とはいえ本書は、晩清中国における日本語小説翻訳の研究を深化させ、多方面で大きく推進させた好著であり、中国近代翻訳文学、日中近代文学関係、ないしは日中近代文学の比較研究においても意義のある研究成果であることは間違いない。中国学界だけではなく、日本学界にも薦めたい著作である。

中国出身で、今日本で韓国文学・東アジア比較文学を研究している書評者からすると、日中韓三国の関係、あるいはもっと範囲

を広げた東アジア文学研究の視座から検討を加える必要性と可能性について思い至らざるを得ない。本書で扱われているのは晩清中国に伝わった日本語小説だが、その多くは、日本から直接韓国に、あるいは中国語訳を経由して韓国に伝わった。当時、日本・中国・韓国の翻訳小説はお互いに密接な交渉・影響関係にあったのである。この問題については、書評者自身の課題として今後考えていきたい。

著者が後記で「〔本書の〕いずれのケースの研究にもまだ解決できていない問題を残している」（二〇〇頁）と述べているように、この分野にはまだ研究の余地が大いに残されているが、著者李艶麗氏とともに書評者も、本書の示唆するところを参考に研究を進めていきたいと考えている。

＊本稿は日本学術振興会科学研究支援事業特別研究員奨励費（課題番号：15J04686）による成果の一部である。

注

（1）夏暁虹「梁啓超与日本明治小説」『北京大学学報（哲学社会科学版）』（第五号）、一九八七年。